

國學院大學學術情報リポジトリ

三宅島における葬送文化の継承・再編：
葬儀の担い手と芸能の伝承者に着目して 趣旨説明
伊豆諸島研究・三宅島の概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川嶋, 麗華 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001565

三宅島における葬送文化の継承・再編—葬儀の担い手と芸能の伝承者に着目して— 趣旨説明 伊豆諸島研究・三宅島の概要

川嶋 麗華

本研究は、令和5年度「宗教文化に関する研究と学術情報発信の体制構築」、令和6年度「宗教文化研究と学術情報発信の推進」の一環として、霊魂観・死生観に焦点を合せて、民俗学・宗教学などの多角的な視点から検討を試みたものである。2024年6月16日、「宗教と社会」学会第32回学術大会において、テーマセッション「人の移動と葬送文化の継承・再編—三宅島の葬儀の担い手と芸能の伝承者に着目して—」において本研究の成果を公開し、その内容に加筆修正を加えたうえで報告する。

なお、『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』17号への掲載にあたっては、学会での発表からタイトル・内容ともに、各々、修正を加えている。

日時：2024年6月16日（日） 14:30-17:00

題目：「人の移動と葬送文化の継承・再編—三宅島の葬儀の担い手と芸能の伝承者に着目して—」

構成：

司会・趣旨説明

川嶋麗華（國學院大學）

発表者

大場あや（日本学術振興会）「三宅島のシンルイと葬儀—“神仏協働”の互助関係—」

川嶋麗華（國學院大學）「火山“島”における葬送の分化・再編—死の多様化とその対応—」

柳原友子（富賀神社／國學院大學）「伝統芸能の中に「信仰」を伝えること—「三宅島の歌と踊り」を事例として—」

高田彩（國學院大學）「おがみ・はらいから祭礼・芸能へ—神教歌を中心として—」

コメンテーター

問芝志保（東北大学）

伊藤純（川村学園女子大学）

趣旨説明：

三宅島を含む伊豆諸島はフィリピン海プレートから吹き出た火山島で、その活発な火山活動は、大規模な自然災害への畏怖や、神々への信仰をもたらししてきた。國學院大學では信仰を巡る伊豆研究が蓄積され、2023年には同学博物館で特別展「三嶋の神のモノガタリ」が公開された。同学の日本文化研究所ではこれらの研究蓄積を念頭に置きつつ、現在の三宅島の

霊魂観・死生観にまつわる調査研究を進めており、本テーマセッションではその成果の一部を報告したい。

伊豆諸島では地理的・自然的要因によって島外の人びとの往来が積み重なり、独自の文化的展開を示しており、三宅島の神着・伊豆・伊ヶ谷・阿古・坪田の旧五ヶ村は村ごとに特有の気風を伝える。例えば寛保2年（1742）の御定書百箇条では伊豆諸島の一部の島が江戸の罪人の流配地とされ、三宅島に流配された禊教の創始者・井上正鐵によって伊ヶ谷地区に禊教が根付いた。歴史的に地役人と神主を兼務した壬生家がある神着地区では、明治以降、神道信者が多く、仏教徒と共存しながら文化を継承するなど、宗旨の異なる者同士の協働がみられる。

また、三宅島で繰り返される噴火はその度に物的・人的な被害をもたらし、集落と社寺・祠などの信仰の場が埋没し、直近の2000年噴火では島民が全島避難を強いられた。避難生活は4年半以上に亘り、避難指示解除後の島人口が減少したほか、避難中に祭祀を担う社人が絶えるなど、島の文化継承にも大きな影響が及んだ。反面、島外から大勢の復興作業員が訪れ、そのまま移住した人びとがいる。更に生業や婚姻を理由とした伊豆諸島内外からの移住や、公務員の定期的な来島、進学による離島を経てのUターンなども組み合わせ、そうした島外の人びととその視点は、島の信仰や生活に影響を及ぼしてきた。

葬送は人びとが生活を営むうえで欠かせない文化の一つである。三宅島では信仰や芸能と絡み合った葬送文化が培われており、また歴史的な人口の流動性の高さを反映し、人びとの移動に応じて再編された重層的な伝承実態が確認される。

地域社会と葬送については、都市化や産業化、とりわけ戦後の地域社会の急激な変貌によって、葬儀の担い手が葬儀社などの専門業者へと移譲された過程が描かれてきた。しかし、葬儀・墓・供養といった個別事象を対象とする研究が多く、葬送研究の鼻祖である柳田國男が構想した、盆正月などの諸習俗を含む包括的な葬送文化という観点からは、その変容の動向が十分に検討されていない。

本テーマセッションでは、これまで別個に研究される傾向にあった芸能と葬儀を併せて取り上げ、三宅島の複合的な葬送文化がどのように継承・再編されてきたのか、分析を試みる。

伊豆諸島研究の概要

1. 伊豆諸島の文化へのまなざし

民俗学の創始者の一人である柳田國男が「我々の学問にとって、沖縄の発見ということは劃期的大事件であった」〔柳田1970〕というように、島々に伝承された文化は黎明期から民俗学へ多分に影響を与えており、民俗学の成立に際しての重要な礎石となった。明治31年（1898）、柳田國男が伊良湖岬で椰子の実を拾い、黒潮を通じて遙か遠方の島々と日本との繋がりを発見したことが知られる〔柳田1982〕。その生涯を貫いてみられるのが、沖縄といった南方の島々への強い探究である。東京朝日新聞社の客員となった大正9年（1920）、柳田は初めての長旅として沖縄へ1カ月ほど滞在し、大正10年（1921）に紀行文「海南小記」を朝日新聞で連載した。この採訪は折口信夫を沖縄に駆り立てるとともに、その後の民俗学の展開に幅広く寄与することとなった。大正11年（1922）には柳田や折口、そして伊波普猷や比嘉春潮といった南方出身の研究者らが連なる「南方談話会」を設立、本会を中心に南島研究が隆盛となっていく。黎明期の民俗学では、沖縄や奄美群島といった南方を中心に、南方と潮流で繋がれた伊豆諸島を含む各島の民俗を渉猟し、日本列島を構成する島々という島嶼文化の調査研究へと展開した。柳田らの共同編集による『島』（1934年創刊）に掲載された、「島関係記事目録」の初回には、伊豆七島が紹介され、民俗学における伊豆諸島への関心の高さが伺える。

伊豆諸島の文化については、今日に至るまで、言語学、地理学、社会学、考古学などを含めた諸分野での膨大な調査研究の成果が累積されてきた。ここでは『日本民俗学大系11地方別調査研究』（1958、坂口一雄「伊豆諸島」）、『伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌』（1993、松崎憲三「伊豆諸島・小笠原諸島と民俗研究」、『伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌 関係文献目録』）を参照しつつ、伊豆諸島の文化に関する調査研究を概括したい。

（1）伊豆諸島の文化に関する記録・調査

伊豆諸島はフィリピン海プレート上に連なる火山島群で約1200万年前に成立したとされる。歴史的には「伊豆七島」とも呼ばれ、現在の有人島としては、大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島がある。式根島は明治22年（1889）に新島から移住した島であり、八丈小島は昭和44年（1969）に全員離島により無人島となった。

現在は、大島町、利島村、新島村、神津島村、三宅村、御蔵島村、八丈町、青ヶ島村のほか、東京都庁の下部組織として大島支庁、三宅支庁、八丈支庁がある。

流配と巡検 伊豆諸島は、「伊豆流配」といった代表的な流配地の一つとして知られ、ふるくは『続日本紀』神亀元年（724）には伊豆大島が登場するほか、『御定書百箇条』（1742）には大島・八丈島・三宅島・新島・神津島が流配先として明記された。こうした経緯から、近世には流人とその関係者、巡検使といった島外からの来訪者を中心として、伊豆諸島に関する記録が散見される。流人である近藤富蔵の『八丈実記』（1848-60）は、八丈島を中心とする伊豆諸島の重要な史料としてあまねく知られるところである。他にも『伊豆七島風土細覧』（1800）や『八多化の寝覚草』（1848）などがある。

また近世の伊豆諸島のようなすを窺い知る史料として、寛政8年（1796）に代官・三河口太忠が伊豆七島を巡検した際の記録（『八丈島筆記』、『七島日記』）など、18世紀末から重ねられた巡検時の記録が数多く残されている。明治20年（1887）、徴兵検査のために実施された

伊豆七島の巡検には坪井正五郎らが随行した〔白井1936〕。

伊豆諸島における組織的調査 その50年後、昭和12年（1937）からは柳田國男の指導のもとで海村調査が行われ、昭和12年度に三宅島を最上孝敬、翌年度に八丈島を大間知篤三が調査した。海村調査は、前年度までの山村調査をふまえ、「全国にわたって山村海村の両生活を比較」するために「比較的交通不便にして従来餘り調査の行はれなかつた土地」〔柳田編1949 435〕を選定したが¹、戦争の激化により中断を余儀なくされた。戦後の昭和24年（1949）、国立国語研究所の八丈島での現地調査には、海村調査の経験を有す大間知が民俗学的見地から調査団に参加し、『八丈島の言語調査』（1950）が刊行された。昭和25年（1950）からは、海村調査で未達成であった南方の島々を含む島嶼部での離島調査を実施した。伊豆諸島では、利島を西垣春次、御蔵島を櫻井徳太郎、青ヶ島を酒井卯作が担当した。また昭和29年（1954）

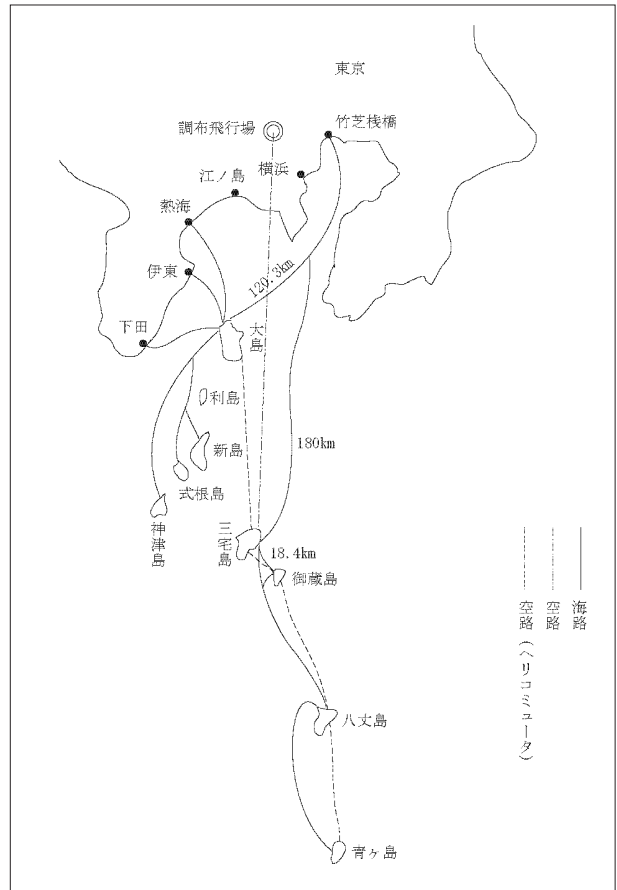


図1 「三宅島・御蔵島位置図」〔東京都三宅支庁編2019〕

7月には井之口章次の指導下で國學院大學の民俗学研究会が三宅島・神津島・新島・式根島での調査を遂行し、『三十年度民俗採訪』が刊行された〔国学院大学民俗学研究会編1956〕。

昭和27年（1952）4月に東京都文化財保護条例が制定され、都内各地で文化財の指定・保護に向けた調査が計画された。総合調査は「通常の調査のほかに特異な自然環境の地域や、なにかの事情で自然環境に大きな変化が予想される地域を対象として行う文化財の総合的な、特別調査」である。伊豆諸島は「太平洋上に散在して本州と全く隔絶している特異な自然環境のために、古い文化、民俗を今もなお温存する地域」〔長谷川1958 3〕として、3年間で全域を総合的に調査する計画が立った。伊豆諸島の中でも「大島および八丈島等に比して調査がおくれている一面、放置されている資料が多いと思われる」〔東京都教育委員会編1958 320〕と、初年度の昭和31年（1956）の調査地に三宅島・御蔵島が選択された²。翌32年（1957）に大島・利島・新島・式根島・神津島、同33年（1958）に八丈島・青ヶ島で行い、『伊豆諸島文化財総合調査報告』全5分冊（1958-65）が刊行された。また千葉県教育委員会も黒潮文化調査団を派遣し、昭和30年（1955）に新島で調査を行った。

昭和28年（1953）に「離島振興法」が公布され、昭和30年（1955）4月には伊豆七島国定公園に指定された³。昭和31年（1956）、東京都建設局公園緑地部が総合調査を実施し、『伊豆七島学術調査報告』（1957）を刊行した。「伊豆諸島文化財総合調査」は広範的な文化財調

査であったのに対し、本書は国定公園の指定をふまえて地学や気候といった自然科学的な見地に重きをおいたものであった⁴。

昭和53-54年（1978-79）には東京都緊急民俗文化財分布調査が行われ、平成4年（1992）には『東京の民俗』8として伊豆諸島の民俗情報が刊行された。

さらに大島町への合併を機に編纂された『伊豆大島志考』（1961）を始め、『八丈島誌』（1973）、『三宅島史』（1982）といった自治体史が編纂されたほか、東京都島嶼町村会『伊豆諸島東京移管百年史』上・下巻（1981）、『黒潮に生きる東京・伊豆諸島』上・下巻（1984）、東京都島嶼町村一部事務組合『伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌』（1993）など伊豆諸島、乃至は豆南諸島を含む東京都島嶼部としての地域資料の刊行が重ねられてきた。

また平成28年度（2016）からは、神奈川大学の日本常民文化研究所が三宅村の受託事業として、民具・文化財等の調査を進めている。その一環として、島民からの聞き書き調査を実施し、その成果を『三宅島のオーラルヒストリー』として刊行している。

伊豆諸島を調査した人びと ここで伊豆諸島における地理学と民俗学の関わりに触れておく。『伊豆七島学術調査報告』に巻頭言を寄せた景観地理学の辻村太郎は、最初に三宅島を訪れた大正3年（1914）のようすを郷土会で報告するなど〔辻村1925〕、長く柳田との親交を有した。また辻村の門下である山口貞夫は、雑誌『島』の編集に携わるなど辻村と同様に柳田と関わり、伊豆諸島をフィールドの一つとして地理学と民俗学の両分野で横断的に活躍した研究者である。山口は、明治35年（1902）の柳田による大島調査の未発表原稿を援用しつつ、自身の伊豆諸島における綿密な調査から『伊豆大島圖誌』（1936）を執筆した。

こうした個々の研究者による民俗調査は戦前から現代にかけて盛んに行われ、早くは本山桂川の『海島風趣』（1926）、『海島民俗誌 伊豆諸島篇』（1933-34）、『御蔵島踏査記録』（1933）、藤木喜久麿の『新島探訪録』（1936、アチックミュージアムノート11）といった報告がある。また島内からの調査としては、月出くの子の『伊豆大島要覧』（1914）、桜井保の『神津島記』（1949）、浅沼悦太郎の『三宅島・御蔵島方言全集』（1937）、『昭和十五年三宅島噴火記録』（1942）などがある。また島内の『伊豆大島年中行事』（1942）を執筆した坂口一雄らの協力により『伊豆大島方言集』（1942）が編纂された。その後も島内外から調査・研究が重ねられた伊豆諸島は、民俗学の黎明期から重要視されてきた地域の一つである。

（2）伊豆諸島の位置づけ

〈孤島〉の伊豆諸島へと至る〈海上の道〉は、伊豆半島の東岸から、房総半島から、三浦半島から、黒潮による南西諸島を始めとする各所から、といった複数のルートが想定される〔川崎1981〕。伊豆諸島はこうしたつながりの中で影響を受け、島嶼ゆえに古い文化を継承してきた地域として注目された。蓄積された学際的研究からは、伊豆諸島が有する多角的な位置づけを読み取ることができる。

日本列島を構成する島々の一部 一つは、巨大な日本列島という島国を構成する〈本土〉と〈離島〉の一部という位置づけである。柳田は離島調査の折、「島国日本の人口、殖産、近代化をはじめ凡百の問題の縮図は、島嶼生活の上に展開されていると言うことができる」〔柳田1966〕と調査の趣意を説明した。また磯村は「日本が「島国」であるということ、「島嶼」の実態を知ることがその繁栄の基礎」〔磯村1981〕であることが重要だとしたように、屢々、日本列島という巨大な島国を構成する島々の一部としての離島の重要性が説かれてきた。こ

うした島嶼部に対する視線は、柳田が沖縄で語った〈孤島苦〉という視点や宮本常一による離島振興論の提唱、そして昭和28年（1953）の離島振興法の制定に繋がる。

黒潮文化圏としての伊豆諸島 こうした列島文化を見渡したときに、南西諸島から北上し、列島沿いに東進して房総半島沖へと至る、黒潮がもたらす文化への影響については、民俗学・考古学や地理学といった諸分野で注目がなされてきた。中でも大間知は相模・伊豆・江戸という北部から伝わる〈日本文化〉に対し、南西部から漂着する〈黒潮文化〉の重要性を説く《黒潮文化圏》を提唱した〔大間知1950 261〕。八丈島と御蔵島の間には黒瀬川と呼ばれる黒潮の幹流があり、伊豆諸島の中でも歴史的に航行の難所とされた。本潮流が分かつ北部と南部は言語や民俗などの諸要素に差異がみられ、文化的に地域が二分される。

政治的中心地・江戸東京との関係性における離島 本州から南東へ突出した伊豆半島と伊豆諸島は、その立地から旧来重要な流配地として知られる。中央から流された人は島々の記録を残すとともに、ときに新しい文化をもたらししてきた。また長らく天領であったため、各島で祭政一致の傾向が強いといった特徴もあった。近代に入ると、最終的には経済的につながりの強い東京へ編入され⁵、離島振興法を受けて各島の港湾や飛行場の整備が進んだことで、現在は大都市・東京の“近郊”にある自然・文化が豊かな離島として観光客が訪れる場所となっている。文化的には、宮本馨太郎によって主部（23区）・西部山麓・東部低地・島嶼という東京都の区分がなされているほか〔荻原・千葉1981〕、地理的要因から「古い文化、民俗」を残存する地域として位置づけられてきた。

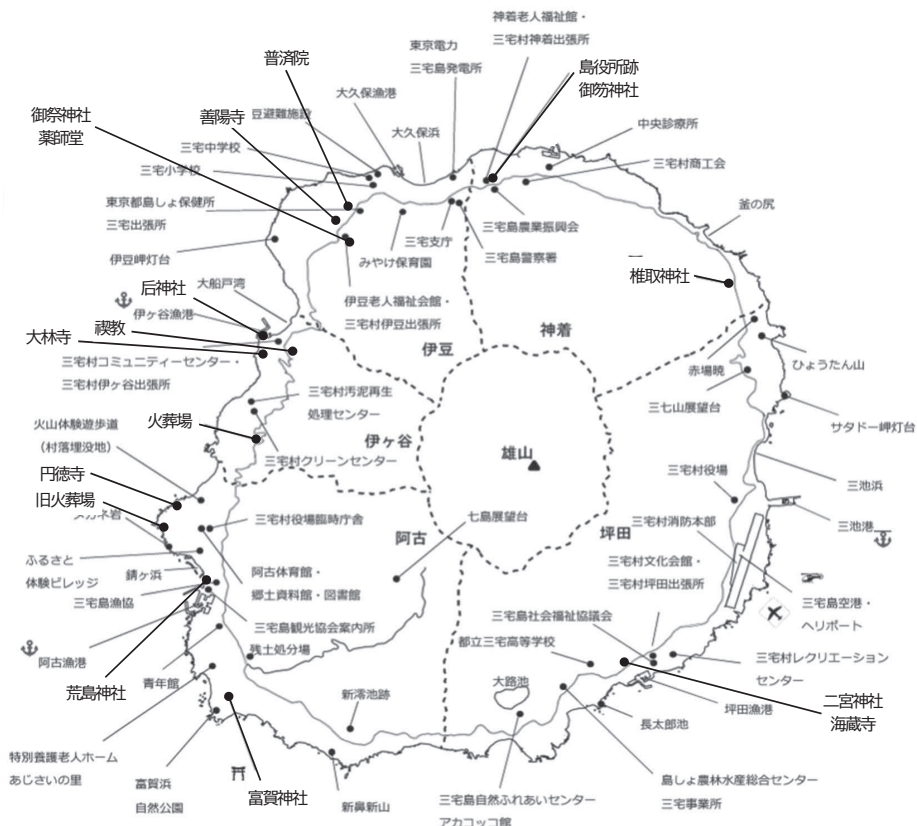


図2 三宅島内の位置関係 「三宅島要図」〔東京都三宅支庁編2019〕を加工

2. 三宅島の概要

火山島である三宅島では、有史以来、数多の噴火が生じ、噴火や火事をうけて集落の焼失・移転などが度重なった。例えば明治7年（1874）の噴火では、神着村の枝郷であった東郷が溶岩で埋没したため、東郷の住人は門ノ原、仲尾坂方面へと移住した。また明治38年（1905）の大火を受けて神着村の一部家屋が農耕地であった土佐・美茂井へと離散し、昭和15年（1940）の噴火では神着村の島下集落が埋没した。

昭和37年（1962）の噴火を始め、現代に入ってから火山活動に伴う噴火が続き、昭和58年（1983）の噴火では阿古の集落が広く埋没した。また、平成12年（2000）の噴火では4年以上にわたる全島避難を余儀なくされ、その間に島内での様々な習俗が中断し、中には再開しないままの習俗もあるなど、三宅島の文化へ大きな影響を与えた。

こうした三宅島の歴史や基礎情報は、すでに『伊豆諸島東京移管百年史』（1981）、『伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌』（1993）などで詳細が整理されている。そのため、本稿では地図や表といった情報を参考程度に記載するに留め、研究内容に関わる重要な情報については各稿で触れることとする。

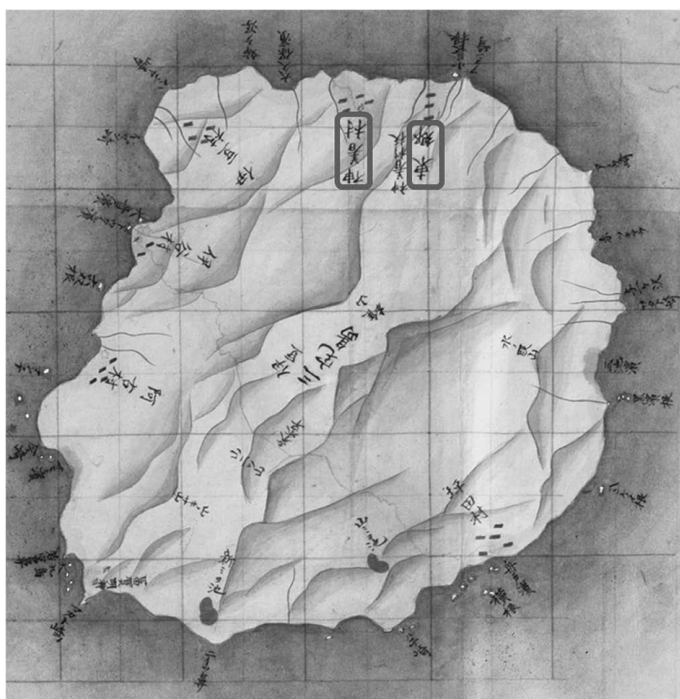


図3 伊能大図彩色図（三宅島）（古地図コレクション「伊豆 三宅島御蔵島」を改編）

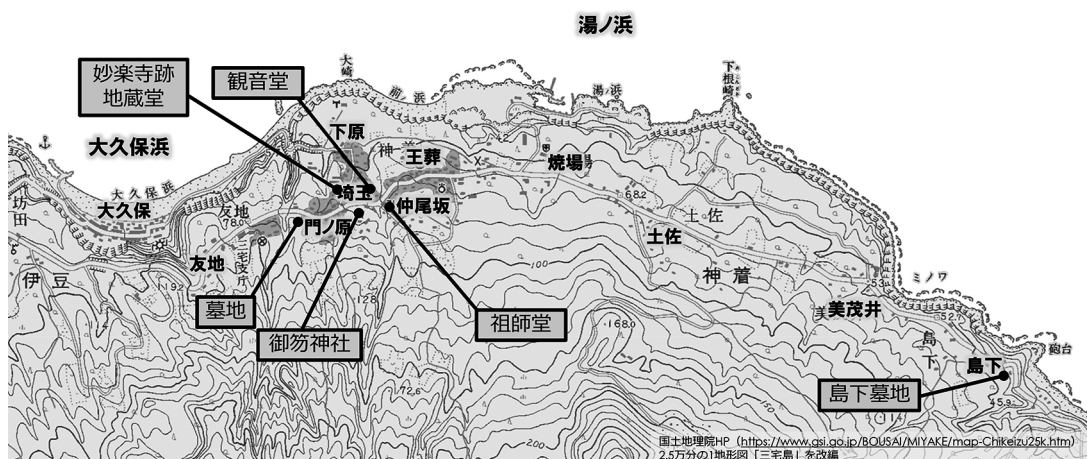


図4 神着地区の位置関係

表1 三宅島の主な出来事

年	主な出来事
応徳2 (1085)	噴火
久寿1 (1154)	噴火
永享3 (1431)	長根村が廃村となる
文明1 (1469)	噴火
文明3 (1471)	伊ヶ谷村が成立する
天文4 (1535)	噴火
文禄4 (1595)	噴火
寛永20 (1643)	噴火 阿古村・全村が焼失する
貞享1 (1684)	元禄3 (1690) まで燃焼し続ける
正徳1 (1712)	噴火 阿古村で家屋が埋没する／伊ヶ谷村に正式な名主を配置する
享保8 (1723)	伊ヶ谷に陣屋を設置する
享保14 (1729)	御蔵島を三宅島から分離する
宝暦13 (1763)	噴火 阿古村が現在地へ移転する
寛政7 (1795)	各村へ正式な名主を配置する
文化8 (1811)	噴火
天保6 (1835)	噴火
明治7 (1874)	噴火 神着村の東郷集落が全滅する
明治8 (1875)	島役所が伊ヶ谷村から神着村へ移転
明治14 (1881)	伊豆七島制の下で地役人・名主・年寄等を置く
明治24 (1891)	東京湾汽船（現・東海汽船）と年間航海の協定を結ぶ
大正9 (1920)	島役所を廃止し、大島島庁三宅島出張所を設置する
大正12 (1923)	島嶼町村制を施行 議会・村長等を置く
大正15 (1926)	普通町村制へ移行／島庁を廃止 大島支庁出張所を設置する
昭和15 (1940)	噴火 神着村・島下集落が埋没する
昭和18 (1943)	三宅支庁開設
昭和21 (1946)	伊ヶ谷・伊豆・神着の3村が合併 旧三宅村発足
昭和28 (1953)	離島振興法公布
昭和30 (1955)	伊豆七島国定公園に指定
昭和31 (1956)	三宅・坪田・阿古の3村が合併 新三宅村発足
昭和37 (1962)	噴火
昭和41 (1966)	三池接岸港完成（2港制へ） 昭和37年の噴火を契機に、三宅島空港開港（週3便）（後に日2便へ増便）
昭和47 (1972)	環状線道路の舗装完了
昭和58 (1983)	噴火 阿古地区・埋没
平成12 (2000)	噴火 4年5ヵ月に亘る全島避難
平成26 (2014)	空路がANA（日1便）から新中央空港（日3便）へ

グラフ１・２ 三宅島の戸数・人口の推移（高田作成）

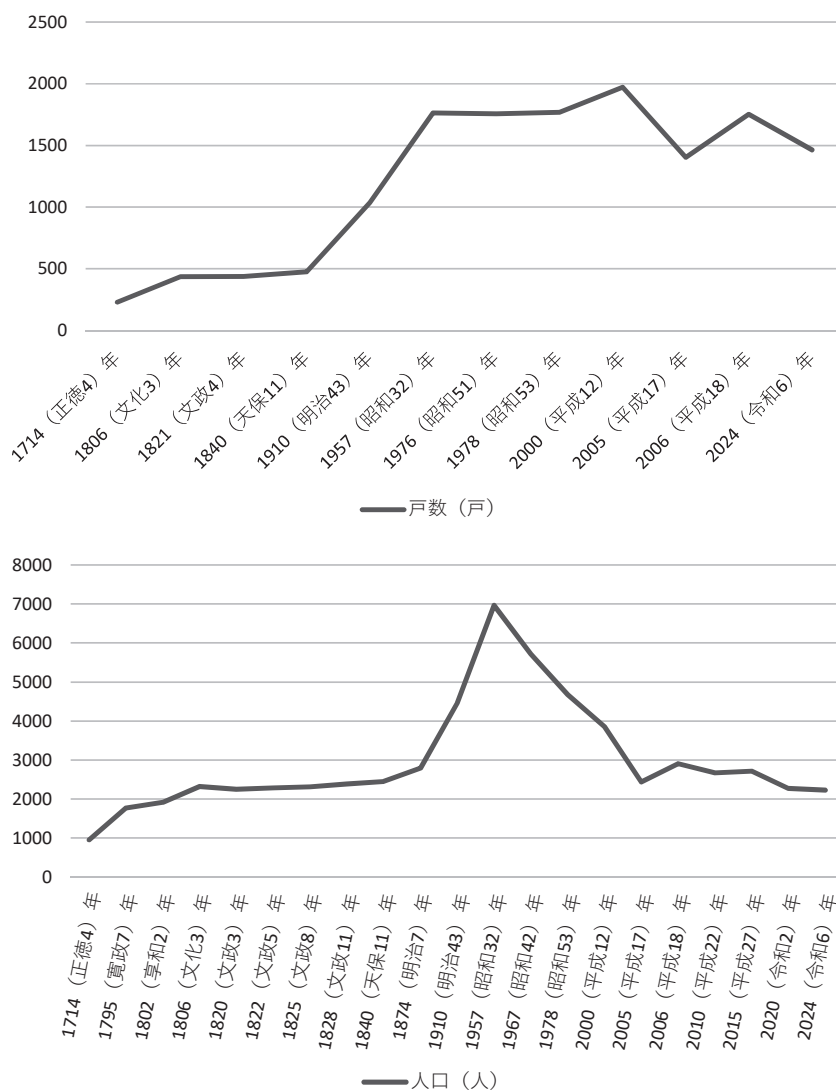


表２ 三宅島の地区別世帯数・人口の推移（大場作成）

	文化3 (1806)	明治7 (1874)	明治43 (1910)	大正9 (1920)	昭和10 (1935)	昭和32 (1957)	昭和53 (1978)	平成12 (2000)	平成18 (2006)
神着	488	543	812	232 941	278 1,271			409 803	414 645
伊豆	242	348	652	223 801	214 920			224 438	213 343
伊ヶ谷	412	496	840	186 832	166 829			125 255	106 182
阿古	580	822	1,426	345 1,345	317 1,303			649 1,255	583 1,016
坪田	602	589	734	295 1,020	318 1,251			565 1,104	437 724

上段：世帯数（戸） 下段：人口（人）

参考文献

- 磯村英一1981「はじめに」『伊豆諸島東京移管百年史』東京都島嶼町村会
大間知篤三1950「八丈島の文化と文献」『八丈島の言語調査』秀英出版
川崎房五郎1981「歴史点描」『伊豆諸島東京移管百年史』東京都島嶼町村会
国学院大学民俗学研究会編1956『三十年度民俗探訪』
白井光太郎1936『伊豆七島巡航日記』春陽堂
辻村太郎1925「三宅島の話」『郷土会記録』大岡山書店
東京都教育委員会編1958『伊豆諸島文化財総合調査報告』1
東京都三宅支庁編2019『管内概要』（令和元年版）
長谷川和夫1958「文化財総合調査について」『教育じほう』121
萩原龍夫・千葉徳爾1981「宮本馨太郎先生と東京の民俗」『東京都の民俗』慶友社
柳田國男1966「序にかえて」『離島生活の研究』集英社
柳田國男1970「郷土生活の研究法」『定本柳田國男集』25 筑摩書房
柳田國男1982「藤村の詩「椰子の実」」『定本柳田國男集』別巻3
柳田國男編1949「序にかえて」『海村生活の研究』集英社

注

- 1 後に柳田は「均しく都會の文化中心から、隔絶して居るといふだけの理由を以て、山と海村とのフオクロアを、二つ一列に並べて見ようとしたことが、すでに我々の不用意であつたのかもしれない」[柳田編1949 3]と、この目的設定に問題があったとしている。
- 2 実際には三宅島・御蔵島でも先述のとおり海村調査・離島調査などが行われていたが、海村調査の報告書である『海村生活の研究』（1949）は「漁撈の勞務組織」や「葬制」といった個別テーマごとにまとめたものであり、同様の体裁をとった『山村生活の研究』（1937）とともに、地域性を切り離した手法に対する批判が生じた。こうした批判を受け、昭和26年（1951）以降、先の調査報告を含む「全国民俗誌叢書」が刊行された。同時期、大間知は海村調査と国立国語研究所の調査をもとに『八丈島』（1951）を創元社から刊行した。離島調査の報告書である『離島生活の研究』（1966）は、「利島」「御蔵島」といった地域ごとにまとめた体裁だが、昭和30年（1955）に柳田が民俗学研究所を解散したこともあり、刊行まで10年以上を費やすこととなった。
- 3 昭和39年（1964）7月に富士箱根伊豆国立公園の伊豆諸島地域として編入され、現在に至る。
- 4 ただし、竹田旦「伊豆諸島の民俗学的位置」のように文化的側面に関する報告も含まれる。
- 5 また、徳川幕府の直轄地（天領）であった寛政8年（1796）、特産品の貿易を目的とした伊豆七島嶋方会所が発足した。維新後には、明治2年（1869）に韮山県、明治4年（1871）に足柄県、明治9年（1876）に静岡県へと移管が重ねられるが、嶋方会所などを介して江戸と経済的な結びつきが歴史的に強かったこともあり、最終的には明治11年（1878）東京府へ移管された。